

平成16年度 第1回豊田市生涯学習審議会 会議録

【日 時】 平成16年4月22日(木) 午後2時から午後4時まで

【場 所】 豊田市役所 教育委員会議室(西庁舎8階)

【出席者】 (委 員) 柴田富信(学識経験者) 会長
北川吉久(学識経験者) 副会長
板倉耕治(区長会副会長)
釘宮順子(子育て支援グループ代表)
後藤冷子(青少年健全育成推進協議会代表)
斉藤秀平(愛知県教育大学教授)
酒井住雄(学識経験者)
平松 猛(市民公募委員)
松山美重子(小中校長会会長)
森 務(市民公募委員)
吉永チズ子(交流館長代表)
(関係各課) 自治振興課長 加藤武男
市民活動センター所長 水野孝一
世代交流課係長 南良明(代理)
子ども課長 藤村信治
学校教育課長 神崎恭紀
文化振興課長 佐々木美好
図書館長 近藤範之
(事務局) 教育次長兼調整監 加藤征志
生涯学習担当専門監 猪狩 諒
生涯学習課長 水野孝之
副主幹 長谷川昇
係 長 倉地康夫
主 査 加藤達志

【次 第】 1 新任委員委嘱状伝達
2 教育委員会あいさつ
3 会長あいさつ
4 議 題
(1) 答申に向けた「生涯学習システム機構のあり方」について
(2) その他
5 報 告
6 連絡事項

【議事の摘要】

1 新任委員委嘱状伝達

- ・ 本年3月、濱本晴之委員が学校を退官されたため、松山美重子委員が新任され、加藤教育次長から委嘱状が手渡された。

2 教育委員会あいさつ（加藤教育次長）

- ・ 平成16年度教育委員会の重点目標の中で、生涯学習についても広くとりあげている。2つの交流館の建設を含め、市民にできる限り良いサービスを提供していきたい。

3 会長あいさつ

- ・ 4月は出会いと別れの季節であり、当審議会でも松山委員が新任された。各課の長も出席して頂いており、教育委員会だけでなく、全市的に広く議論していきたい。

4 議 題

（1）答申に向けた「生涯学習システム機構のあり方」について

会 長：生涯学習システム機構について、今年度中に答申することになっているが、限られた審議会の中では十分時間をかけて問題解決するのは難しい。したがって特に今日的な課題について議論していきたい。

生涯学習の課題については、プロジェクト方式で検討しないと生きた活動・振興にならないと思う。それについては資料に従い事務局から説明してもらおう。また市は優秀で意欲的な職員が多いが人事異動は宿命である。様々な課題解決のための研究をしていくには、継続的に実施していかないと発展がない。したがって大学などと連携し、システム機構をしっかりと作りあげていくことが重要である。

事務局：（資料説明）

会 長：1ページにあるシステム機構長には愛知教育大の斉藤先生、生涯学習研究開発センター長には名古屋大の牧野先生にお願いしたい。プロジェクト方式で時間をかけて研究するには大学の力が不可欠である。3ページにある執行部主任を教育次長にお願いし、十分な市役所内の連絡調整を期待したい。豊田市生涯学習推進本部は、本部長が市長、副本部長が助役・収入となっているが、これまであまり機能してこなかった。

4ページの研究プロジェクトの1～5は、委員のこれまでの意見を大まかにまとめたものである。プロジェクト方式とは「研究計画を立て、課題を解決する」というのが私の解釈である。大学の先生の力をお借りして、資料をまと

めさせて頂いた。

委員 A : 4 ページのプロジェクト 1 ~ 5 は、前回まで審議会で議論した 5 つの機能別ではなく対象別である。これまでの機能別の方が興味深い。機能別とプロジェクトのマトリクスで取りまとめたらどうか。情報発信・PR 機能は全体でやった方が効果は高い。

事務局 : 5 つの機能は大切である。この資料は機能を踏まえた上でプロジェクトを考えたものである。

委員 B : システム機構の基本は 5 つの機能にある。その中での課題をプロジェクトとしてあげたものである。また実現にうつすには大学・企業との連携が不可欠である。答申を考えるとこれまでの議論の流れをうまく表現しながら、何が足りないかを考える必要がある。

委員 A : 機能別の発想は生かしていきたい。生涯学習プランナーの提案は、機能で考えるととてもわかりやすい。そういった提案をうまく生かしてほしい。

委員 C : 研究開発センターで実施するプロジェクトは、他の大学とも連携して行う必要がある。また市も部署が変わっても関心のある人は参加できるようにすると良い。

会 長 : 研究開発センターの構築には多くの時間がかかると思うが、研究者の協力により画期的なものになるであろう。各委員がどのプロジェクトに関われるかの意見をお聞きしたい。

委員 D : プロジェクト 3 の家庭・学校・地域社会、及びプロジェクト 4 の子育て支援に関われると思う。

委員 E : 現場の声をきちんと聞く必要がある。そうでないと絵に描いた餅になる。

委員 F : 研究開発センターが実現化すれば、地域のコミュニティも機能すると思う。

委員 G : 実戦部隊としては、研究開発センターで検討されたことが様々なところと連携しているとやりやすい。

委員 H : 交流館を使用している市民としては、このような形で動いていくことは喜ばしいことである。

委員 I : 調査研究をするには市民の意識を吸い上げることが重要である。そうすればプロジェクトと機能のどちらから見ても動いていくであろう。

委員 J : システム機構は難しいと感じる。家庭と学校との関係などこれまでの審議会で議論してきたことを継続していくと良い。総論だけでなくポイントを絞って実行できるものにすべきである。

委員 B : 第 3 回審議会（平成 15 年 11 月）で出された社会教育審議会での提案の検証において、何がネックなのかを調査研究することが重要であると思う。

会 長 : プロジェクトはあくまでも例示であり、現在重要と思われるものを書き出している。他に何かあれば追加していきたい。

委員 B : プロジェクト 2 に入るかもしれないが、産学官の連携、中でも高等教育機関との連携が重要である。

委員 A : プロジェクト 2 の関係では、万博のボランティアリーダーを 200 人募集したところ、700 人以上の募集があったという。女性は 40 歳台が多い一方、男性は 60~70 歳台のシニア世代が多かったという。

市民活動センター : ヤングオールドサポートセンターでは高齢者のセカンドライフを楽しんでもらい、その力を有効に活用するようにしている。

子ども課 : 子ども課としてどのように連携していくのかが読みきれていない。児童育成計画を策定しているが、その部分で研究開発センターと関われるかと思う。

委員 B : これは生涯学習の研究開発センターであるので、生涯学習に関わる部分での連携を図るべきである。

世代交流課 : プロジェクト 5 で市町村合併のことがあげられているが、研究開発センターで基本的な方向性を出し、それぞれの地域の特性を生かしながら、役割分担できるとありがたい。

自治振興課 : 個々の課題をつぶしていくとこんなことを研究してほしいという事が出てくると思う。地域と学校との連携を図りたい。

図書館 : 途中から審議会に参加しているため、これまでよくわからない部分があったが、システム機構の組織の中で図書館も連携調整を担っていきたい。

委員 C : 中央図書館、交流館の図書室、学校の図書館との連携を研究開発センターの中でできると良い。

学校教育課 : 学校が中心となって行っている地域との関わりでは、総合的な学習の時間の中でお離子のゲストティーチャーをお呼びするなどの活動を行っている。地域が中心となってやっているものでは、竜神地区と益富地区で子どもが安全・安心できる地域づくりのサポートとして、通学時に犬の散歩を行っている。調査研究では進んだ事例をモデルプランとして広報したらどうか。

会 長 : 学校 5 日制になり、子どもをどうやって地域で育てていくかが大きな課題である。プロジェクトとしてあげているもの以外で他に何かあるかを事務局でアンケートをとってほしい。

事務局 : 文化やスポーツの審議会もあるので、生涯学習に関わるもので例示をあげてほしい。

委員 G : プロジェクト 6 の地域総合型スポーツクラブでは高橋地区はどのようにやっていくかで課題が多く、うまくまわっていない。

教育次長 : 平成 15 年度は高橋地区、上郷地区で行ったが、事業計画で理想を追求しすぎてあまりうまくいかなかったようだ。地元の方が自主運営できる組織作りを目指したい。

委員 F : 末野原地区では 1 年間検討してきたがうまくいっていない。趣味でやって

いるうちは良いがリーダーをやりたがる人はほとんどいない。

委員 I : 美里中学と野見小では、交流館祭の時に部活を休みにしたら、ボランティアに 200 名近く集まった。学校は地域との連携の拠点になるべきであると思う。また万博関係でフラワーロードの話があり、学校だけでなく老人クラブやロータリーの人もいっしょにやっているがその方が効果はある。現場の人たちが声を出し合うことが大切である。

学校教育課 : 部活動は異年齢との交流の場でもあり、社会性を身につけるのに重要であると思う。またこれまで地域のスポーツクラブで活躍した人は上の大会には出られなかったが、今は西三大会に出られるようになった。喜ばしいことである。

委員 G : 地域のスポーツクラブは補助金をいただけるうちはよいが、なくなった場合続けていけるかは不安である。

委員 J : ひとりリーダーがいれば組織はうまくまわっていくが、なかなか抜けられなくなることが課題である。

会 長 : 研究開発センターは、ボランティアでの活動が基本であるが、昼食代などある程度の予算付けは必要である。また答申は9月中にしたいと考えている。

委員 B : 牧野先生の出された報告書は、今まで議論したことも入っていると思うので、答申にも引用したらどうか。

(2) その他

特になし

5 報告

各自、配布資料に目を通すよう説明

6 連絡事項

- ・ 次回は 8 月下旬頃開催

次回開催に向けて

- ・ 資料 4 ページにあげたプロジェクトの例示以外に他にあるかのアンケートを事務局が委員に送付する。あわせて次回審議会のスケジュールをお聞きし、開催日を決定する。